

総合問題 (教)
(問題)
2023年度

注意事項

〈2023 R05170015 (総合問題 (教))〉

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は2～10ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
4. 記述解答用紙記入上の注意

- (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
- (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

(例)
3 8 2 5 番
↓

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

- (5) 解答に際して、文字数の指定がある場合には、改行で生じる余白および句読点も文字数に含めること。
- (6) 解答欄に句読点を記入する際には、句読点も1マスに記入すること。
5. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
6. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
8. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

以下の資料①～資料③を使って、問一、問二、問三に答えなさい。文字数の指定がある場合、改行で生じる余白および句読点も文字数に含む。なお、資料については、抜粋等、試験用に加工した部分がある。

問一 資料①は、ステイブン・ピンカー(二〇一九)(橋明美・坂田雪子訳)『21世紀の啓蒙―理性、科学、ヒューマニズム、進歩―(下)』草思社の一部を抜粋したものである。主旨を二〇〇字以内で要約しなさい。

問二 同書に関連して、人類学者と考古学者は、資料②のようにコメントしている。下線①および下線②を日本語に訳しなさい。

問三 資料③は、戦後日本の長期欠席と不登校の発生率に関するデータである。これらのデータをふまえて、以下の問いに答えなさい。

(一) 図5のデータだけではなく、図6のデータもあわせて参照することではじめて得られる知見を二〇〇字以内で記述しなさい。

(二) 資料②の指摘をふまえ、資料①の主張が抱えている問題点を挙げ、資料①～資料③をあわせて読むことによって、不登校など教育事象を研究する上でどのような示唆が得られるかを四〇〇字以内で記述しなさい。

資料① ステイブン・ピンカー著(橋明美・坂田雪子訳)『21世紀の啓蒙―理性、科学、ヒューマニズム、進歩―(下)』(二〇一九、草思社)より一部抜粋

「賢い人」を意味するホモ・サピエンスは、情報を有効に活用する種である。エントロピーがもたらす腐敗にも、進化がもたらす苦勞にも、情報を用いることで対抗し、そのために、あらゆる場所で知識を獲得してきた。それは周囲の地形や動植物、それらを制圧するための道具や武器についての知識、さらにはその道具や武器の扱いについて、親族や仲間だけでなく敵ともネットワークや規範を築くという知識である。そしてその知識を蓄積し、言語や身振り手振り、直接の指導によって共有してきた。

やがて長い歴史のわずかな期間で、人類は文字や印刷技術、電子メディアといった技術を思いつき、その技術によって知識を何倍にも、いや何乗倍にも広げていった。その超新星のようにまばゆい知識は、人間であることの意味を絶えず考え直させてくれるものである。わたしたちは何者で、どこから来たのか、世界の仕組みはどうなっているのか、人生で大切なものは何か。こうしたことが理解できるかどうかは、拡大しつづける膨大な知識の蓄積から、どれだけのことを学びとれるかにかかっている。もちろん教育を受けていない狩猟民、牧畜民、農民も立派な人間であることに変わりはないが、人類学者がよく言及するように、彼らは「現在、地元、形而下の物事」を志向しやすい。

しかし「知ること」を通し、わたしたちはもつと外へと目を開くことができる。自国とその歴史、世界中の多様な世代のさまざまな習慣と考え方、過去の文明の失敗と成功、細胞や原子からなる小宇宙と惑星や銀河からなる大宇宙、数字と論理とパターンが織りなす目に見えない現実。これらを知ること、意識をより高い水準に引き上げることができるのだ。それは長い歴史をもつ知性的な種に属していることの恩恵だろう。

これまでに蓄えられた文化的知識が、物語や徒弟制度によって伝えられてきてもう長い。学校教育にも数千年

の歴史がある。わたしは紀元前一世紀から紀元後一世紀に生きたユダヤの律法学者（ラビ）、ヒレルの逸話を聞いて育ったのだが、それによるとヒレルが若いころ、授業料が払えなかったので、寒さで凍え死にそうになりながらも、学校の屋根に上って天窓から授業をこっそり聴いていたという。かつてさまざまな時代において、学校は実際の、宗教的、愛国主義的な教えを若者に伝授するためのものだったが、それに対して啓蒙思想では何よりも知識を大切にするため、学校の役割はそこからいつそう広げられることとなった。

「教育学者のジョージ・カウンツもいう。「近代になると、学校教育はそれまでの概念をはるかに超えて重要な役割を担うようになった。過去、学校はほとんどの地域で小さな社会機関にすぎず、ごく少数の人々の人生にしか直接影響しなかった。それが近代には社会のさまざまな層に拡大し、ついには国や教会、家庭や所有地と並び、社会で最も強力な制度の一つとしてその地位を確立するまでになった」。今日、教育はほとんどの国で義務化されている。また一九六六年の「経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約」にこれまで調印した国連加盟国一七〇カ国によって、基本的人権として認められている。

教育が人々の意識にもたらす影響は明らかなものから目に見えにくいものまで、人生のあらゆる面に及んでいる。まず明らかな影響のほうだが、衛生面や栄養面や安全なセックスに関する知識が少しでもあれば、健康を向上させたり寿命を延ばすことに大いに役に立つ。また、現代は文字の読み書きや計算の能力が富を得るための基礎である。発展途上国で若い女性がお手伝いとして働こうにも、メモを読んだり備品を教えたりできなければ雇ってもらえない。もっと上のキャリアを求めるにつれ、専門的な事柄を理解する高い能力がますます必要になる。一九世紀に貧困の蔓延から抜け出し、それ以来どこよりも速く成長を遂げているのは、子どもの教育に熱心に取り組みだ国々だった。

ただし社会科学のあらゆる問題と同様、教育と経済成長に相関関係があるからといって、そこに因果関係もあるとは限らない。はたして「教育に力を入れると、国は豊かになる」という因果関係はあるのだろうか？ 国が豊かになると、教育水準は上がるのだろうか？ この問題に答えを出すには、原因は必ず結果に先行するという事実を利用するのも一つの方法である。いくつかの研究によれば、教育を「時点1」で、豊かさをその後「時点2」で評価し、その他の条件の変動による影響を取り除いた場合、教育に力を入れた国は実際豊かになることが示唆されている。少なくとも、宗教色のない合理主義的教育が施されていけば、国は豊かになる。

というのもカトリック教会が教育を管理していたスペインでは、教育が盛んだったにもかかわらず、二〇世紀まで西洋諸国のなかで経済的に遅れをとっていたからだ。「庶民の子どもは教養や教理問答を口頭で伝授され、簡単な手仕事の技術をいくつか教わるだけだった。（中略）科学、数学、政治経済、宗教色のない歴史を教えることは、研鑽を積んだ神学者以外の人々には問題が多すぎるとみなされていた」。今日アラブ世界の一部で経済成長が遅れているのは、やはり聖職者の干渉のせいだといわれている。

もっと精神的な領域についても、教育はすばらしい恩恵を与えてくれている。それは実生活に役立つ知識や経済発展以上にすばらしいものともいえるだろう。なぜなら今日、教育に力を入れれば入ればほど、明日以降、その国はより民主的で平和な国になるからだ。ただし教育の効果は広範囲にわたるので、学校教育を受けた人々がどのような因果経路をたどり、社会的調和へとつながっていくのかを見定めるのは難しい。もちろん、なかには教育の影響がそのまま人口統計や経済面に表れる場合もある。たとえば教育を受けた女子は成長後に出産する子どもの数が少なく、すぐに暴力を振るうような若い男性を相手に若年妊娠に至る可能性も低い。また前述のとおり、国は教育に力を注ぐ国ほど豊かになり、豊かになるほど平和で民主的になる傾向がある。

また、いくつかの因果経路は、啓蒙思想の価値観の正しさを立証するものである。考えてみてほしい。教育を受けることで、どれほど多くの変化がもたらされることか！ たとえば、教育を受けていけば、「指導者は神権によって統治している」とか、「自分と似ていない人々は人間以下の生き物だ」などという盲信は危険でおかしいと思えるようになる。世界には多様な文化があり、自身が自国の文化と密接に関わっているように、どの文化

もそれぞれの生活様式と密接に関わっており、どちらが優れているとか劣っているとかいうことはないと思ふことができる。カリスマ的な救世主が国を破滅に導いてきたこと。たとえどんなに強い信念をもっているとしても、それがどんなに世間的に信じられていても、その自分の信念は間違いの可能性もあるということ。優れた生き方とそうでない生き方があること。他人や他の文化は自分が知らないことを知っているかもしれないこと。そうしたすべてを学ぶことができる。何より、暴力に頼ることなく争いを解決する方法があると学ぶことができる。そしてこうした思考ができるようになると、独裁者の支配に屈したり、隣人を拘束・殺害しようとする動きに同調したりしにくくなる。

だがもちろん、こういった知識は確実に得られるわけではない。とりわけ支配者が独自の教義や、もう一つの事実（オルタナティブ・ファクト）、陰謀論を広めている場合は難しい。口では知識の力を褒めそやしながらも、支配者のやり方に異議を唱える国民や思想を弾圧している場合も同様だ。

教育の効果を検討した研究によると、教育を受けた人々は実際に啓蒙されている。彼らは人種差別や性差別をすることが少なく、外国人嫌悪や同性愛嫌悪、権威主義にも陥りにくい。想像力や独立心、言論の自由が高い価値を置き、投票したり、ボランティア活動に参加したり、政治的意見を表明したりすることが多い。労働組合、政党、宗教団体や地域団体などの市民団体にも積極的に所属する。さらに他の市民を信頼する傾向もある。これは「社会関係資本」と呼ばれるもので、社会を動かす貴重な主成分だ。社会関係資本によって人々は相手を信頼することができ、周囲に騙されてばかを見るのではと恐れることなく、自信をもって、契約を結んだり、投資をしたり、法律を遵守したりできるようになる。

こうした理由から、教育の拡大は―何よりそれが最初にもたらす識字率の向上は―人類の進歩のなかでも最も大切になってくる。うれしいことに、その他の多くの分野における進歩と同様、教育もまた馴染み深い経過をたどってきた。つまり、啓蒙時代より前はほぼすべての人が悲惨な状態にあったが、その後いくつかの国がそこから脱却し、近年になると残りの国々もそれに追いつくようになり、まもなく教育の恩恵はほぼ世界中に広がるうなのだ。

〔図1…7頁に掲載〕を見るとわかるように、一五世紀から一六世紀にかけて西ヨーロッパでは識字能力はごく一部のエリート、すなわち人口の八分の一以下の人々の特権だった。また一九世紀の世界全体の状況は、一七世紀以前の西ヨーロッパと似たような水準だった。しかし二〇世紀になると世界の識字率は二倍になり、二一世紀に入ると四倍になった。今では世界人口の八三パーセントが読み書きができるようになっていく。

しかも実際には、この数字以上に読み書きのできる世界人口は増えていると考えられる。というのも、文字が読めない一七パーセントの人々は、ほとんどが中高年だからだ。中東や北アフリカの多くの国々において、六五歳以上で読み書きのできない割合は七五パーセント以上に上るが、対して一〇代から二〇代の若者で読み書きのできない割合はたったの一桁台である。二〇一〇年の若者（一五歳から二四歳）の識字率は九一パーセントにまで達していて、一九一〇年のアメリカ全体とほぼ同じ割合だった。識字率が最も低いのは、やはり戦争で荒廃した、世界で最も貧しい国々で、南スーダン（三二パーセント）、中央アフリカ共和国（三七パーセント）、アフガニスタン（三八パーセント）などになる。

読み書きはすべての教育の基礎になるが、〔図2…7頁に掲載〕では、基礎教育を受ける子どもが世界的に増加していることが示されている。ここでもグラフの動きはお馴染みのものだ。一八二〇年には世界の八〇パーセント以上の人々が学校に通っていないだったが、一九〇〇年までに西ヨーロッパと英語圏の先進国で大多数が基礎教育を受けられるようになった。そして今日では、世界の八〇パーセント以上の人々が教育を受けている。教育を受けた人の割合が最も低いサハラ以南のアフリカの場合でも、現在の率は一九八〇年の世界平均と同程度であ

り、他の地域と比べると、一九七〇年のラテンアメリカ、一九六〇年代の東アジア、一九三〇年の東ヨーロッパ、一八八〇年の西ヨーロッパと同じ水準になる。現在の予測では、国民の五分の一以上が教育を受けていない国は、今世紀半ばまでに五カ国だけになり、今世紀末には就学していない人の割合は全世界でゼロになるという。

「書物はいくら記してもきりが無い。学びすぎれば体が疲れる」。この言葉にもあるように、知識の探求には際限がない。人間の幸福を測る指標には、戦争や病気のようにゼロという下限のあるものや、栄養摂取や識字率のように一〇〇パーセントという天井のあるものもあるが、知識の性質はそれらとは異なる。そして知識それ自体が無限の広がりをもつだけでなく、技術が動かす経済社会では知識への関心も急速に高まっている。

世界では識字率や基礎教育を受ける率が一〇〇パーセントへと向かいつつある一方、単科大学や総合大学、大学院で高等教育を受ける人も増加し、就学年数はすべての国で延びつづけている。アメリカでは、一四歳から一七歳の若者のうち高校在学者の割合は一九二〇年にはわずか二八パーセントだったが、一九三〇年には約五〇パーセントに上昇した。二〇一一年には八〇パーセントが高校を卒業し、うち七〇パーセントが大学に進学している。また、学士号をもつアメリカ人は、一九四〇年には五パーセント以下だったが、二〇一五年には約三分の一にまで増加した。

〔図3…7頁に掲載〕では、サンブルの国々の就学年数がどれも上昇していることが見てとれる。近年の水準を見ると、グラフで一番下のシエラレオネでさえ、就学年数は四年間になり、一番上のアメリカでは十三年間（一部大学を含む）にもなる。ある予測では、今世紀末までに世界人口の九〇パーセント以上が何らかの中等教育を受け、四〇パーセントが大学に進学するとされている。また教育の拡大は「世界人口が今世紀後半ピークに達し、そこから減少する」という予想の主な理由でもある。なぜなら、教育を受けた人ほど、子どもをもつ数が少ない傾向にあるからだ。

このようにまだ国によって就学年数に差があるとはいえ、現在、知識の普及が革命的に進んでいることを思えば、その差はあまり関係なくなるかもしれない。今や世界のほとんどの知識は、図書館にしまわれているのではなく、オンライン上で手に入れることができるからだ（しかもその大部分は無料）。スマートフォン一つあれば、大規模公開オンライン講座（MOOCs）などの遠隔学習を誰でも利用できるようになりつつある。

その他の点でも教育の格差は縮小傾向にある。アメリカでは一九九八年から二〇一〇年のあいだに、低所得者層やヒスパニック系、アフリカ系アメリカ人の子どもたちの就学準備状況が大幅に改善した。理由の一つは、おそらく無料の就学前プログラムが利用しやすくなったことだろう。加えて、今日では貧困家庭でも本やコンピューターやインターネットを利用する機会が増えたことや、親が子どもと触れ合う時間が増えたことも要因だと思われる。

格差の縮小といえば、女性を学校に行かせないという究極の性差別が減少していることも大いに注目し値する。このことが重要なのは、人口の半分を占める女性が教育を受ければ、その分技能の蓄積も倍になるからというだけではない。「ゆりかごを揺らすその手が世界を支配する」からでもある。教育を受けた女性は健康状態が良くなり、少数の子どもを健康に育てる。社会への寄与も大きくなり、ひいては国の繁栄にもつながる。西洋の国々は、何世紀もかけてようやく、男性だけでなく国民全員を教育することが大切だと理解した。

〔図4…7頁に掲載〕を見ると、イングランドの女性の識字率は一八八五年まで男性より低かったことがわかる。世界全体では、一九七五年の時点で読み書きを教わる女子は男子の三分の二と遅れていたが、そこから急速に盛り返し、二〇一四年には男女同数が読み書きを教わるようになった。二〇一五年、国連は「ミレニアム開発目標報告」で、世界は初等・中等・高等教育におけるジェンダー平等を達成するという目標に到達したと発表した。

〔図4〕のアフガニスタンとパキスタンの線には国情が反映されている。アフガニスタンは女性の識字率が最も低い国だが、人間開発の度合いを測るほとんどの指標も最低に近い（二〇一一年の男女合わせた識字率も三二

パーセントときわめて低い)。そのうえ、一九九六年から二〇〇一年にかけてはタリバンの支配下にあった。イスラム原理主義を報じるタリバンは数々の残虐行為をなすとともに、女性が学校に通うことも禁止し、アフガニスタンに隣接するパキスタンの一部支配地域で、女子が教育を受けるのを妨害しつづけている。

マララ・ユスフザイはそうした支配地域の一つ、パキスタンのスワート県で暮らしていた少女で、家族は学校を経営していた。彼女は一一歳だった二〇〇九年から、女子が教育を受ける権利を世界に向けて訴えていた。そして二〇一二年一〇月九日、忌まわしい日として語り継がれるであろうその日、スクールバスに乗り込んだタリバンの男に頭部を銃撃された。だが幸いにも奇跡的に生き延び、その後は史上最年少でノーベル平和賞を受賞して、世界で最も尊敬される女性の一人となっている。

これらの地域の闇は今なお濃いだが、しかしそのなかにあつてさえ進歩のあとを見ることが出来る。この三〇年間で、アフガニスタンでは女性の識字率が二倍に、パキスタンでは一・五倍になった。パキスタンの数字は一九八〇年の世界、一八五〇年のイングランドと同じ水準になる。断言こそできないが、このまま行けば女性の識字率は積極的な運動や経済成長、良識の広まりという世界的な潮流に押され、一〇〇パーセントへと向かっていきそうである。

〔本文中の☒1〜☒4は、次頁に掲載〕

※ 文献の引用に際して、本文中の☒の番号や表記等を変更したり、一部省略したりした。

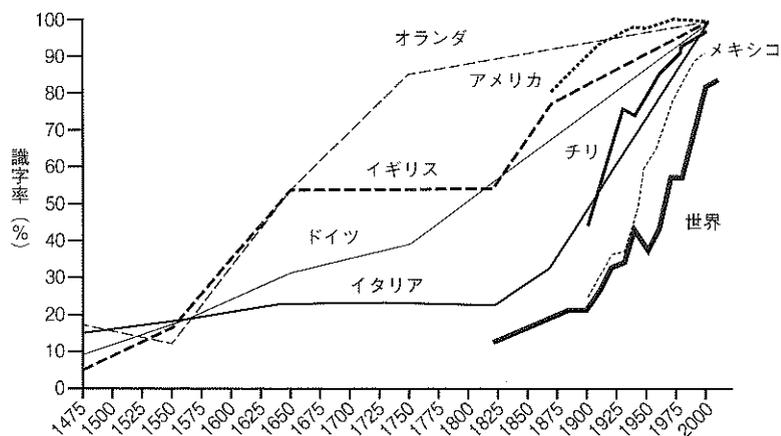


図1 識字率 (1475-2010)

情報源：Our World in Data. Roser & Ortiz-Ospina 2016b. 次のデータも含む。【1800年以前】Buringh & van Zanden 2009。【世界】van Zanden et al. 2014。【アメリカ】National Center for Education Statistics。【2000年以降】Central Intelligence Agency 2016。

※ページ下部に出典を追記しております。

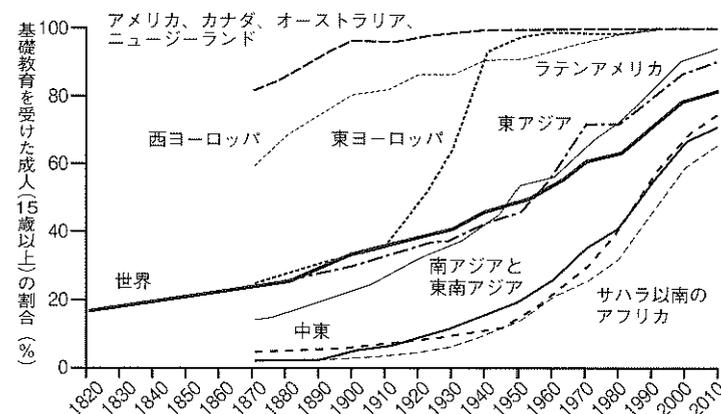


図2 基礎教育 (1820-2010)

情報源：Our World in Data. Roser & Ortiz-Ospina 2018. van Zanden et al. 2014 のデータに基づく。グラフは最低1年間教育を受けた15歳以上の人の割合を示している（あとの時代になるほど就学年数は増える）。van Leeuwen & van Leeuwen-Li 2014. pp.88-93 を参照。

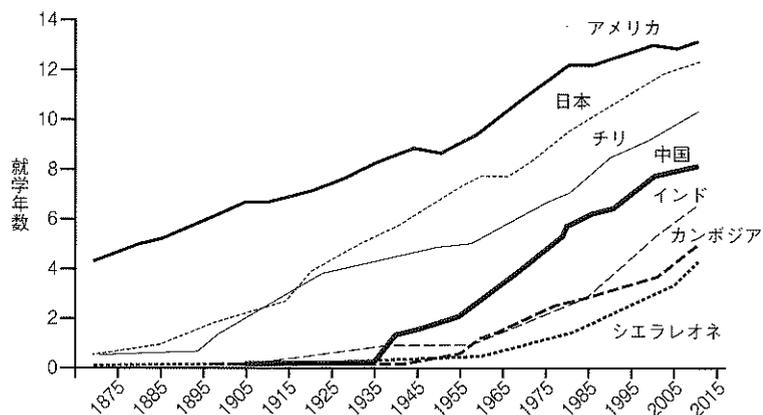


図3 就学年数 (1870-2010)

情報源：Our World in Data. Roser & Ortiz-Ospina 2016a. Lee & Lee 2016 のデータに基づく。データは15歳から64歳までの人口が対象。

※ページ下部に出典を追記しております。

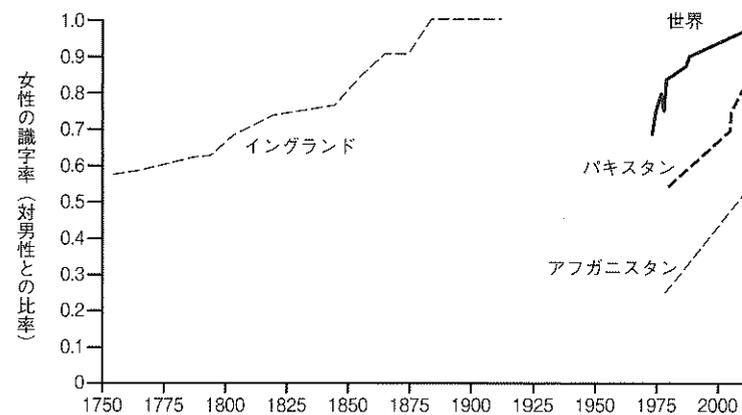


図4 女性の識字率 (1750-2014)

情報源：【イングランド (成人全体)】Clark 2007. p.179。【世界, パキスタン, アフガニスタン (15歳から24歳まで)】HumanProgress. <<http://www.humanprogress.org/fl/2101>>. UNESCO Institute for Statistics のデータに基づく。World Bank 2016f に概要がある。「世界」のデータは年ごとの平均だが、年によって含まれる国はわずかに異なる。

※WEB掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。

図1：World Bank (2023); Various sources (2018) - processed by Our World in Data. "Literacy rate" [dataset]. World Bank, "World Bank Education Statistics (EdStats) 2023"; Various sources, "Cross-country literacy rates" [original data]. Retrieved January 23, 2024 from <https://ourworldindata.org/grapher/cross-country-literacy-rates>

図3：Data from Barro and Lee (2015) and Lee and Lee (2016) - "Average years of schooling: Average years of formal education for individuals aged 15-64.". Published online at OurWorldinData.org. Retrieved from: <https://ourworldindata.org/grapher/mean-years-of-schooling-long-run?tab=chart&country=USA-CHL-CHN-KHM-JPN-IND-SLE> [Online Resource]

資料② David Graeber and David Wengrow (2021), *The Dawn of Everything : A New History of Humanity*, Farrar, Straus and Giroux: New York, p.18

(一部抜粋)

※この部分は、著作権の関係により掲載ができません。

資料③ 不登校児童生徒の割合（1,000人あたりの不登校児童生徒数）の推移（図5）と中学校の長期欠席率（50日以上）の推移（図6）

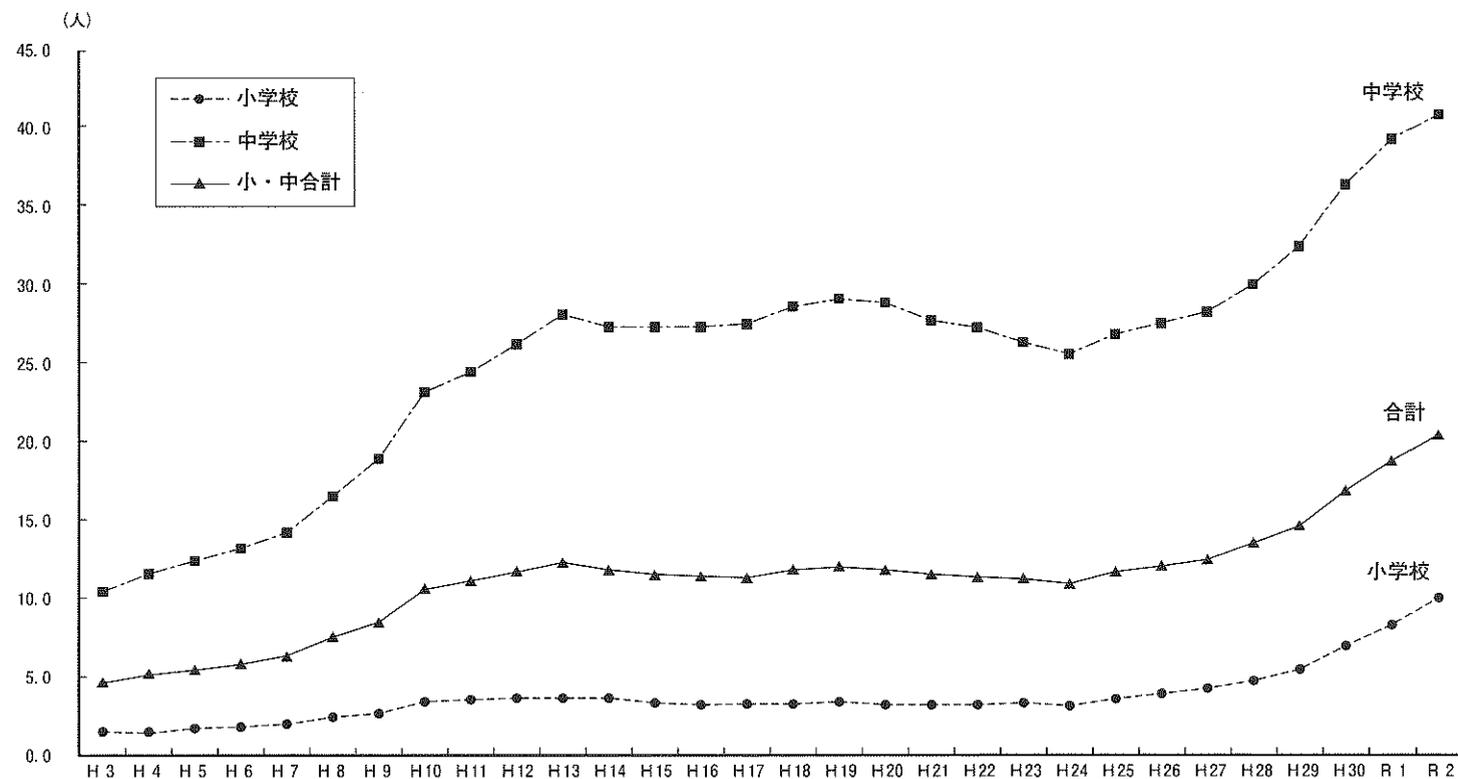


図5 不登校児童生徒の割合（1,000人あたりの不登校児童生徒数）の推移（文部科学省調べ）

注) 不登校児童生徒とは「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるために年度間で30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」を指す。

出典： https://www.mext.go.jp/content/20211007-mxt_jidou01-100002753_1.pdf

※この部分は、著作権の関係により掲載できません。

〔
下
余
白〕

<2023 R05170015 (総合問題(教))>

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

採点欄	問1		問2①		問2②		問3(一)		問3(二)	
	+	-	+	-	+	-	+	-	+	-

<2023 R05170015 (総合問題(教))>

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

総合問題(教) (解答用紙)

注 意

1. 受験番号(算用数字)・氏名は指示に従ってただちに所定欄に記入し、それ以外に記入してはならない。
2. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
3. 解答はHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで書くこと。
4. 試験終了時にはこの解答用紙を裏返して机の上に置き、指示を待つこと。
5. 文字数の指定がある場合には、改行で生じる余白および句読点も文字数に含めること。
6. 解答欄に句読点を記入する際には、句読点も1マスに記入すること。

問1	5	10	15	20	25	30

問1	
+	-

問2	下線①	
	下線②	

問2①	
+	-

問2②	
+	-

問3	(一)	5	10	15	20	25	30
	(二)						

問3(一)	
+	-

問3(二)	
+	-